

大鴉

あるとき、寂しい真夜中、忘却のかなたに遠ざかった
何巻もの、古い科学を記した書物を読み、気弱になり
疲れながらも、深い思いに耽^{ふけ}っていた。
うたた寝の眠りをした。

不意に、叩く音が聞こえた。誰かが私の部屋のドア
を叩いている、軽く叩いている。「誰か来ている」私
は呟いた。「私の部屋の戸を叩いている」

「ただ音が聞こえる、ほかにはない」



THE RAVEN

Once upon a midnight dreary, while I pondered, weak and weary,
Over many a quaint and curious volume of forgotten lore —
While I nodded, nearly napping, suddenly there came a tapping,
As of some one gently rapping, rapping at my chamber door.
“ ’Tis some visiter,” I muttered, “tapping at my chamber door —
Only this and nothing more.”

THE RAVEN by Edgar Allan Poe

Once upon a midnight dreary, while I pondered, weak and weary,
Over many a quaint and curious volume of forgotten lore,
While I nodded, nearly napping, suddenly there came a tapping,
As of some one gently rapping, rapping at my chamber door.

"T is some visiter," I muttered, "tapping at my chamber door—
Only this, and nothing more."

大鴉（おおがらす）——普通訳文で——あるとき寂しい真夜中、忘却のかなたに遠ざかった何巻もの古い科学を記した書物を読み、気弱になり疲れながらも深い思いに耽^{ふけ}っていた。うたた寝の眠りをした。不意に、叩く音が聞こえた。誰かが私の部屋のドアを叩いている。軽く叩いている。「誰か来ている」私は眩^{めまい}いた。「私の部屋の戸を叩いている」「ただ音が聞こえる、ほかにはない」

大鴉——おほがらす——エドガー・アラン・ポー——西条八十訳

—

わびしき夜更け、われ弱くくたびれごち、忘れし教^{をしへ}
の奇^くしき巻^{まき}々に、

こころ潜^{ひそ}めつ、いつとなく、うつらうつらと睡^{ねむ}るとき、
にはかにかろく敲^{たた}くおと、

誰^{たれ}びとか、いとひそやかに打^うつごとく、
わが室^{へや}の扉^とを、ほとほと、

「こは賓^{あひ}人^{びん}」と眩^{めまい}きぬ、「わが室^{へや}の扉^とをひたうつは」——

音のみ、かくて影はなし。

Ah, distinctly I remember it was in the bleak December,
And each separate dying ember wrought its ghost upon the floor.
Eagerly I wished the morrow:—vainly I had sought to borrow
From my books surcease of sorrow—sorrow for the lost Lenore—
For the rare and radiant maiden whom the angels name Lenore—
Nameless here for evermore.

ああ、はつきり覚えている。それはたいへん寒い十二月だった。一つ一つの消えかけている燃えさしは、それぞれの霊の形を床のうえに作り出している。明くる日が、早く来ることを私はしきりと願った。私は、失ったレノアへの悲しみの止まるのを書物から引き出そうと、空しく求めていたのだった。天使らがレノアと名付けた
稀なる光り輝く乙女。

その名は、この世には永遠にない。

二

あはれさやかにおもひづ、
冷き十二月の夜半なりき、
離ればなれの燃えさしの床に怪しきかげなぐる。
われ朝あけをひた戀ひぬ、
書にもとめてわが憂さを逐はんとせしもあだなりき。
憂さは誰がため亡きレノア、
まれの光のわが乙女、
天使が呼ばふ名のレノア、
いま永久にその名なし。